

管内肉用牛一貫農家における流行性出血病ウイルス感染事例とその対応

東部家畜保健衛生所

○田代久宗・弘中由子・柿原 新

中部家畜保健衛生所

福岡 恒

流行性出血病ウイルス (EHDV) は、節足動物媒介性ウイルス (アルボウイルス) の一種である。現在、1、2、4～8 の血清型が確認され、そのうち血清型 2 はイバラキウイルス (IBAV) である。また、血清型 6、7 は病原性が示唆されている。今回、EHDV-6 が関与した事例が発生し、対応を実施したので概要を報告する。

1 発生概要

令和 6 年 10 月 28 日、肉用牛一貫農場の繁殖牛 1 頭が、約 1 か月前から難治性の発熱、流涎、食欲廃絶を呈し、臨床獣医師による治療を継続していた。また、昨年度以降、他家保管内で EHDV-6 による発熱、流涎が 1 例、流産が 1 例確認され、管内他農場でも本ウイルスの関与を疑う事例が発生していた。そこで、当該獣医師から本ウイルスを疑う病性鑑定依頼を受け、発症牛の検査を実施した。さらに同農場内の浸潤状況確認のため、同居する繁殖牛についても検査を実施した。

2 材料及び方法

発症牛及び同居牛 19 頭の全血と血清を用いてウイルス学的検査を実施した。

3 成績

発症牛では遺伝子検査陽性、ウイルス分離陰性、中和抗体価：IBAV 32 倍、EHDV-6 256 倍以上。同居牛は遺伝子検査陽性 14/19 (陽性率 73.7%)、ウイルス分離 EHDV-6：1 頭陽性、中和抗体価：遺伝子陽性牛で 64 倍～256 倍以上。

4 考察および対応

発症例において EHDV-6 の関与が示唆された。また、発症牛は発症から検査までの 1 か月以上、血液中にウイルス粒子が存在したと考えられた。同居牛検査では、有症牛は認めなかったが 14 頭が遺伝子陽性で、現時点での発症率は 6.7% (1/15) であった。また、同じ牛房内での陽性・陰性の混在から、既報の通り接触感染等の可能性が低く、感染予防にはベクターの制御が重要だと考えられた。

本ウイルスは新興ウイルスであることから、飼養者や関係機関に予備知識がなく、他の昆虫媒介感染症 (牛伝染性リンパ腫等) と混同し、発症牛がキャリアとなるとの不安の声も聞かれた。そこで当所は、本疾病は季節性に流行し、症状も一過性で、回復後は体内からウイルスが除去されることを説明し、飼養者等が正しい知識を得られるよう指導した。また、本ウイルスのベクターはヌカカのみであり、ヌカカの発生・増殖対策として、水辺の草刈りや土壌の乾燥に努めるよう指導した。今後は衛生情報の作製・頒布等により、衛生指導を継続し、来シーズンに向けて飼養者等の衛生意識の醸成を促していく。